

おしほろと
のむすめ (下)

吉村
昭



ふ
おん・しいほるとの娘
(下)

吉村
昭

毎日新聞社

ふぉん・しいほと娘(下)

昭和五十三年二月二十日 印刷
昭和五十三年三月一日 発行

著 者 吉村 昭

編集人 吉田 掟二

発行人 高原 富保

発行所 毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋
〒550 大阪市北区堂島
〒603 北九州市小倉北区紺屋町
〒450 名古屋市中村区名駅

印刷 図書印刷

製本 佐久間製本

ふ
お
ん
・
し
い
ほ
る
と
の
娘

(
下
)

お稲は、二宮敬作の家に到着してから数日後、長崎にいる母のお滝に手紙を書いた。

長崎を出立してから臼杵城下に入るまで茶屋甚四郎の番頭や手代に世話になったこと、さらに渡海して八幡浜から卯之町へ山越えの途中、笠置峠の茶店に迎えに出ていた二宮敬作に会い、敬作宅に無事に到着したことを記した。

また敬作は、誠実さと豪放さをかねそなえた人物で、医業は繁昌し門人も擁していること、敬作の妻イワは、自分を夫の師であるシーボルトの娘として大切に遇してくれること、敬作とイワの間には二人の男児がいることなども書きつづつた。さらに遠隔の地に来たことは心細いが、別れぎわに母が髪にさしてくれた玳瑁の櫛を母と思って心の支えとし、生きてゆきたいとも書き加えた。

敬作も、お滝宛にお稲の無事到着をつたえる書簡をしたため、さらに茶屋甚四郎にもお稲の旅に助力してくれたことを謝する旨の手紙を書き、お稲の母宛の手紙とともに飛脚に託した。

お稲は、晩酌をする敬作の口からかれの生い立ちも知った。

「私は、百姓の小倅だ」

と、敬作は笑いながら言った。

敬作は、文化元年（一八〇四）伊予ノ国西宇和郡磯津村大字磯崎に生れた。家は代々農業をいとなみ、父は六弥、母はシゲと言った。六弥は酒の小売などもし、生活はそれほど苦しくはなかった。

敬作は、三人の姉、二人の妹の中のただ一人の男であった。当然、農業をつがねばならぬ身であったが、村の病人が、貧しさ故に医療をうけることもなく死亡し土葬されるのを眼にして、医者になって人命を救いたいと思い学問をしたいと父親に申し出た。

両親は驚き、親族の者たちとともに激しく反対した。しかし、敬作は屈せず、両親も敬作の純粋な気持ちに心を動かされかれの希望をみとめた。父の六弥、母のシゲが健康で、三人の姉、二人の妹も農業を手伝っていたので娘に婿をとらせ、家業をつがせてもよいと考えたからであった。

十四歳の折に漢学に素養のある村の者について教えをうけさらに文政二年、十六歳で長崎遊学を志した。宇和島藩では藩侯の深い理解のもとに蘭学を摂取する気風が強く、そのためには長崎へ赴くことが最も効果的だと考えられていた。

敬作は、その年から十一年間長崎にとどまり、その間にシーボルトに師事した。そして、シーボルト事件に連座し、「江戸構 長崎払」を申し渡されて長崎を去ったのである。お稲が三歳の年であった。

「私は、シーボルト先生の創設された鳴滝塾でお教えを受けたが、塾生たちは、私に芋敬という渾名をつけた。芋ばかり食べていたので、芋好きの敬作、つまり芋敬というわけだ」

敬作は、笑った。

「お芋がそのように好きなのですか？」

お稲は、たずねた。

「好きではない。銭がないので飯など食べられず、芋を常食にしていた。好んで食べているふりをしていただけだ。それから、今では芋を見るのもいやだ」

敬作は、杯に酒をみたした。

「私は、銭に困り何度生家にもどろうとしたか知れぬ。が、学問をしなければ自分の志を達することができぬと自らを上げまし、人に雇われては小銭を得、芋を食べる菜に塩をふりかけて空腹をいやして長崎にとどまった。そうした私を見かねたらしく、シーボルト先生は書き物の整理、植物の採取などを命じられ、学費をおあたえ下さった」

敬作は、うるんだ眼をした。

「先生はカピタンとともに江戸参府の旅に出られた折、高良斎とともに私も連れて行って下されたが、その御好意も忘れられぬ。伊予ノ国の片田舎の百姓の倅である私にとって、大坂、京をへて江戸にまで行くことができたのは、見聞をひろめる上で願ってもない機会であった。先生は、私をケイサキ、ケイサキと呼んで目をかけて下された。私は幸福者だ」

敬作は、神妙な表情で言った。

その後、長崎を去った敬作は、上須戒村で医業を開業したが、かれが医家として豊かな学識をそなえていることが宇和島藩公伊達宗紀の知るところとなった。宗紀は、敬作を宇和島に移住させたかったが、シーボルト事件に連坐し謹慎の身であることを考慮して、天保四年（一八三三）、宇和島に近い卯之町で開業させたのである。敬作、三十歳の年であった。

敬作は、扶持米を賜る身になり、時折り、藩に召し出され、蘭書の翻訳やシーボルトを通じて得た海外事情などについて説明したりしていた。かれのもとには、藩医村尾高格をはじめ蘭学に熱意をもつ藩士が教えを乞いに集り、敬作は宇和島藩の代表的な蘭方医として畏敬されていた。

お稲は、そうした敬作の半生を知るとともに敬作の口から父シーボルトについての知識も得、父に対する思慕の念もたかまった。

或る夜、敬作は、

「お稲さんは、鰻が大好きか」

と、たずねた。

「好きでございます」

お稲は、答えた。

「やはりシーボルト先生の子だな。シーボルト先生もお好きだった。江戸に参府した折のことだが、將軍家御侍医であった土生玄碩^{ハツシロ}という眼科医が先生にお教えをうけたいと思ひ、贈物をとどけさせてきた。それが鰻の蒲焼だった。玄碩殿は、通詞に先生が鰻を好まれるということをきいたらしい。先生

は苦笑されながら食べたが、極めて味がよいのに驚かっていた。その後、長崎へもどられてからも江戸の鰻はうまかったと口癖のように言っておられた」

敬作は、なつかしそうな眼をして言った。

お稲は、敬作の口にする父の話に耳をかたむけていたが、敬作もシールボルトの話をするのが楽しそうだった。

お稲は、ふと思いついたように、

「母は、なぜ異国人の父と知り合い結ばれるようになったのでしょうか？」

と、問うた。

敬作は、返答に窮したように口をつぐみ、お稲に視線を据えた。

「お稲さんは、どのようにきいている？」

敬作は、さりげない口調で反問した。

「父が出島から長崎の町に往診に出た際、たまたま病氣をしていた母がみていただき、それが縁で親しくなったとか。出島に入るには傾城の身でなければ許されぬために、傾城として出入りしたときいています」

お稲は、無心な表情で言った。

「詳しいいきさつは知らぬが、そのようにきいている」

敬作は、視線をそらせて言った。

かれは、お稲が父母の結びついた事情について知らぬことを意外に思った。そして、それは周囲の者が深い配慮をはらって、お滝がオランダ行き遊女であったことを秘している

結果であると思った。

長崎とはそのような地なのだ、と、敬作はあらためて思った。他人の過去について洗ひ立てるようなことは、避ける傾向が強い。現在、お滝の夫である時治郎という男も、妻が過去に遊女でありシールボルトとむすばれてお稲をもうけたことを、それほど意に介さないのだろう。そうしたおおらかな一面が土地の気風として根をはっていることを、十一年間長崎ですごしたかれは知っていた。

卯之町は、閑静な町であった。

町の東に低い山が迫り、西には宇和川をへだて山がちらちらしている。街道は町なかを通り、宇和川を越えて山間部に入り、法華津峠の難所を越えて宇和島城下へ伸びていた。

お稲は、敬作の妻イワに連れられて町の中を歩いた。

「長崎は、眼をうばうような華やかな港町だときいています、それにくらべるとこの町は田舎町で……」

イワは、謙遜するように言った。

「そんなことはありません」

お稲は答えたが、たしかにイワの言う通りであった。

長崎の町の賑わいが、あらためて思われた。町の前面には港がある。そこには大小さまざまな船が行き交い、三色旗をかかげたオランダ船や華麗な色彩でよそおわれた唐船がうかんでいる。家並は港をかこむようにひろがっていて、丘陵にもせりあがっている。多くの坂が入り組み、家々は軒をさし

交し、その間におびただしい神社や寺がいかに美しい屋根を突き出させていた。寺や社を中心とした祭礼がひんばんにもよおされ、その都度、町には着飾った男女が行き交い、音曲の音が流れ、夜になると軒燈がつらなる。

そのような長崎の町にくらべると、卯之町は色彩の乏しい町であった。

しかし、お稲は、卯之町に好感をいだいていた。落ち着いた空気が感じられるからであった。人々の表情は、様におだやかであった。イワと歩いていると、道の前方からくる人々は頭を深々とさげて挨拶し、イワも腰をかがめて丁寧に挨拶を返す。家の中から出て来て頭をさげる者も多い。

道はきれいに掃き清められ、水が打たれていた。人々は貧しい服装をしているが、丹念に洗濯を欠かさないらしく小さくつぶらしたものを身につけている。それらは、町の人々の律義な気風をしめしているように思えた。

町の人々の生活は、質素であった。敬作の家でも、生活はつましかった。それは、藩の緊縮政策による節儉令が庶民生活に徹底普及していたからであった。

お稲は、敬作の家についた翌日、母のお滝が贈ってくれた玳瑁の櫛を敬作夫婦に見せた。

「この櫛は、父が異国から母に送ってくれたものです」

お稲は、櫛を敬作に渡しながら言った。

敬作は、見事な櫛を見つめながら師のシーボルトのことを思い起しているようだったが、お稲に返すと、

「その櫛は、大切にしまっておくだけで髪にはささぬように……」

と、言った。

お稲は、敬作の言葉の意味を察することができなかった。櫛はシーボルトからの贈物なので、紛失せぬようにしまっておく方がいいという忠告か、と思った。が、正月か祭礼などの祝いの日には、その櫛を髪にさしたかった。

敬作は、いぶかしそうなお稲の表情に気づいたらしく、「長崎であれば、そのような見事な櫛をさしてもどうということはないが、この宇和島藩領では、お触れが出ていて華やかな櫛をさすことは禁じられている。櫛や笄かんざしは、木、竹、真鍮、鯨で作ったもので、しかも無地のものにかざられている。そのような玳瑁でつくった高価で華美な櫛はさせぬのだ」と、

と、気の毒そうに言った。

お稲は、ようやく敬作の言葉の意味を理解することができた。

敬作は、思案するような眼をすると、

「窮屈な話だとも思うかも知れぬが、私はそうは思わぬ。近年諸国では飢饉が相つき、米不足による物価の高騰がいちじるしい。それに異国からの脅威も増し、それに対抗する海防に巨額の金を投じなければならぬ。そのような折に節儉に徹した生活に堪えることが必要だと思う。日本国は島国で、産物の量もかぎられている。それらを浪費することなく、貯える

ことが賢明な道だ」

と、言った。

さらに敬作は、節儉のお触れについて説明した。それは、極めてきびしい制限であった。まず男女の着物は、木綿、布晒にかぎられる。祝儀の席に出される食物も一汁一菜を原則とし、婚礼の際に嫁が持参する道具も簞笥一さお、長持一さお、葛籠一荷、挾箱一個を越えてはならぬと規制されているという。

お稲は、敬作の言葉にしたがって櫛を行李李の奥にしまい、衣服も地味な木綿の物を常用するようにした。

敬作の家の食事は麦が主で、米がわずかばかり混る程度であった。それも朝食のみで、午食は団子汁の類が多く、夜は雑炊であった。

四月に入って間もなく、敬作は、

「お稲さんに雑炊や団子汁ばかり食べさせるのも気の毒だ。今夜は、この地方の名物をイワに作らせる。私も久しぶりなので食べてみたい。お稲さんも、どのように作るのか見てみるといい。」

と言って、笑った。

その料理はサツマと称されているもので、この地方独得のものであった。お稲は、サツマという言葉から鹿児島地方の料理かと思ったが、関係はないという。敬作も、名称の由来は知らなかった。

サツマを作るといので、家の中には明るい空気がひろが

った。雇われている男が走りまわって、白身の魚を買い入れてきた。

お稲は、たすきをかけて台所に立ち、イワの調理を見守った。どのようなものが出来るのか見当もつかぬだけに、興味深く思えた。

イワは、魚を焼いた。塩をつけずに焼く白焼きであった。その身をほぐしたイワは、摺鉢ですりつぶし、井に盛った。つぎに味噌を摺鉢ですり、それを摺鉢の中に塗りつけ、逆さにする。と火にかざして少し焦がし、内部に井の魚を入れてまぜ合わせ摺鉢ですった。そして、魚の頭を入れて作ったダシ汁を入れ、さました。その間に、雇女は、米を少量まじえた麦飯を炊き上げ、調理は終った。

夕食の膳についたお稲は、どのようにして食べるのか興味を持ちイワの手の動きを見守った。

イワは、茶碗に温い飯を盛り、それに白身の魚と味噌の混った汁をかけ、刻みネギをふりかけた。

「さ、食べてみなさい。」

敬作が、茶碗を手にながら言った。

お稲は、箸を動かした。

「ウマカ（おいしい）」

お稲は、思わず長崎言葉で言った。

敬作は、満足そうに笑うと、

「オゴツオー（御馳走）だろ？」

と、長崎言葉で言った。

お稲は、笑った。焼いた白身の魚には生臭さが消え、それに焼味噌が加わっているので淡泊で香ばしい。汁が冷く、それが温い麦飯にかけられているのでさっぱりした味であった。「オマイ オカエバ シナハイ（お前、お替りの給仕をしない）」敬作が、おどけたように再び長崎言葉でイワに言った。イワは、その言葉の意味がわからぬらしく敬作の顔に眼を向けた。

「私がいたします」

お稲は立つと、お櫃の傍に坐って飯を盛り、汁をかけた。敬作とイワは顔を見合せて笑うと、再び箸を動かさしはじめたお稲に視線を向けた。夫婦の眼には、お稲に対するいとおしさがやわらいだ光になってたまたま出ていた。

遠くから寺の鐘の音がきこえてきた。

お稲は、顔をあげた。長崎で耳にしていた寺の鐘の音が思い起されたが、すぐに眼を伏すと箸を動かしていた。

お稲は、二宮敬作とイワの間にイシという幼い娘がいることを知った。長男が逸二、長女がイシ、末子が終吉で、イシはイワの実家に行っていた。

下男に連れられて家にもどってきたイシは、母のイワにうながされてお稲に丁寧に挨拶をしたが、顔をあげるとお稲の顔にじっと視線を据えた。その眼には、驚きと好奇の光がかんていた。

お稲は、口もとをゆるめた。イシの凝視の意味が、すぐに

察しられた。イシの視線は、自分の眼にそそがれている。イシは、初めてみるお稲の青い瞳に呆気にとられているのだ。イワは、娘の無遠慮な凝視に気づき、うろたえたように、「さ、御挨拶がすんだら、外に遊びに行きなさい」と言ってイシの手をつかみ、立ち上って部屋を出て行った。お稲は、苦笑した。あらためて自分の瞳の色が特殊なものであることを感じた。

長崎では人に凝視されることは少かったが、卯之町に來てから、お稲は多くの人々の驚いたような視線を意識した。道を歩いていると、通行人が足を釘づけにしてお稲の眼を見つめる。子供たちが後からついてきて、時折り前にまわり、お稲の顔を見上げることも多かった。敬作の家の前には旅宿が二軒並んでいたが、旅人が女中などから混血のお稲のことを耳にするらしく、敬作の家をのぞきこむ。混血の人間など長崎以外にはいないので、旅人たちは珍しがつてお稲の姿をひと目でもみようとするのだ。

お稲の美しい容姿も、人々の興味を一層つのらせているようだった。華奢な体は均整がとれていて、肌が驚くほど白い鼻筋も端正に通っていて、青い瞳が眼に妖しい美しさをあたえていた。

お稲は、そうした人々の視線にいつの間にかなれた。自分の父が異国の名医であるという矜持が、彼女を強く支えているのである。

卯之町に來てから一ヶ月がすぎ、雨期を迎えた。

お稲は、苟立ちはじめていた。敬作の家に來てから、あてがわれた離れ家の中でぼんやり過したり町の中を歩いたりしていたが、それにも飽いた。家事を手伝うことがわずかな慰めだったが、敬作の妻イワは、そのようなことをして下さっては夫に叱られます、と言って制する。お稲は、無聊を持て余していた。

学問をするために長崎からわざわざ卯之町まで來たのに、敬作は学問を教えてくれる素振りもみせない。養育とは、ただ自分の寢食を引き受けてくれるという意味であつたのか、とさえ思つた。

或る夜、敬作は、珍しく酒も飲まずに書見をしていた。

お稲は、イワを通じて敬作に話をしたいと申出て、許しを得た。敬作の部屋に入つたお稲は、部屋の隅に体をかくして坐つた。

「なにかな？」

敬作が、たずねた。

「このようなことを申し上げてお叱りをうけるかも知れませぬが……」

お稲は、低い声で言つた。

「どのようなことでもよい。言つてみなさい」

敬作は、お稲を見つめた。

「学問のことでございます」

お稲が思ひきつたように言ふと、敬作は、

「そのことを口にする頃だろうと思つていた。どのように考

えているか、あなたの氣持もきいてみたかつた」

と言つて、坐り直した。

「こちらにお世話になりましたのは、学問をしたいからでございます。参りましてから一ヶ月がたちました。何卒、学問をお教え下さい」

お稲は、畳に手をついた。

「長崎へ歸りたくなつたのではないのか？」

敬作は、うかがうような眼をした。

「いえ、歸りたくなどございません。学問をしに卯之町に來たのでございます」

お稲は、強い口調で言つた。

「その言葉をきいて私も安心した。私もそのつもりでお稲さんに卯之町へ來てもらつたのだ」

敬作は表情をやわらげたが、すぐにきびしい眼をすると、

「学問を習いたいというが、学問にもいろいろある。なにを習いたいというのだ」

と、問うた。

お稲は、一瞬、返答に窮し、

「オランダの文字を習うとか……」

と、言つた。

「それが習いたいと言うなら、いっそ通詞のいる長崎の方が好都合であらう」

敬作は、突き放すように答えた。

お稲は、口をつぐんだ。たしかに敬作の言う通りオランダ

語を習得する目的を果すためならば、長崎で通詞に接する方がいい。卯之町までくる必要はなかったのだ。

「お稲さん。あなたはオランダ語を習いたいというが、いたいそれを何の役に立てるおつもりだ。通詞ならば、オランダ人と役人の間に立って、両者の考えを相手方に理解させる役目がある。あなたは、まさか通詞になりたいなどとは思っていないだろう。通詞は世襲で、他から割りこむ余地はない。それに、女のあなたが通詞になれるはずもない。通詞は出島の蘭館でオランダ人と接するが、出島にはオランダ行きの遊女以外に女は入れぬ」

敬作の言葉に、お稲はうなずいた。

お稲も、通詞になる気持などみじんもなかった。ただ学問をしたいという願いが強く、それがオランダ語を習いたいという気持につながっただけであった。

彼女は、敬作に問いつめられて、自分が口にする学問が、きわめて漠然としたものであることに気づいた。父シーボルトにオランダ文で手紙を書きたいと思ったこともあるが、それが学問を志す動機としては余りにも他愛ない。それにシーボルトとの文通は絶え、お稲が父に手紙を出す機会もなくなっている。

お稲は、学問修得などという言葉を口にしてきたことが恥しく思えた。年頃の娘が習う歌舞音曲の芸事と同じように学問を考えていたようにも思え、敬作と眼を合わせることが辛かった。

「しばらく考えてみたいと存じます」

お稲は、頭をさげた。

敬作は、無言でうなずいた。

お稲は、廊下に出た。雨が勢を増していて、お稲は傘をかざし、庭石をふんで離れ家にもどっていった。

天候は不順で、領民は作物の收穫に悪影響があらわれぬかとおそれていた。

前年の雨期には雨が降らず、早魃^{かんばつ}が諸藩領にひろがった。殊に隣藩の大洲藩領では農作物の被害が甚しく、七月十六日から二日間にわたって、郡中町の榮善寺で雨乞いのための千人踊がもよおされ、二十日にも城下の如法寺で同様の雨乞いがおこなわれた。物価は不安定で、人心は動揺していた。幸い宇和島藩領では米作も平年並であったが、物価は依然として上昇傾向にあった。

梅雨が上がり、樹の葉の緑が濃さを増した。

母のお滝からお稲の無事到着を喜ぶ手紙が送られてきた。今年の唐船の入港隻数は例年通りであるので、家業も順調だと書かれていた。文作はおぼつかない足どりで歩くようになったが、体が脾弱^{ひじやく}であることが気づかわれるとも記されていた。また、四月十七日夜明けに長崎の勝山町で出火騒ぎがあったが大事に至らなかったこと、儉約の町触れがつたえられているが、季節的な祭礼はつづけられていることなどもつづられ、末尾に、学問修業にはげむ余り体をこわさぬようにと

いう注意が添えられていた。

お稲は、鬱々として日を過していた。学問修業と言っても、なにを手がければよいのかわからなかった。

六月初旬の夜、イワが離れ家にやってきて、敬作が呼んでいることを伝えてくれた。

居間に行くと、敬作はひとりで酒を飲んでた。

「どうだ、考えはまとまったか」

敬作は、おだやかな眼をして言った。

「どのように考えてよいやらわかりませぬ」

お稲は、力なく答えた。

「それでは、私の考えを話そう。あなたは、オランダ語を習いたいという。そのような望みをもつことは尊いことだが、なぜ習いたいのか、それがはっきりしていない。そうだな？」

敬作は、念を押した。

「はい」

と、お稲は答えた。

「よくきくのだ。オランダ語を習うことは、オランダの書物を読むことによって西洋の知識を得るためだ。その知識は人によってさまざまだが、私の場合は医者としての知識だった。従来の支那から伝えられた医学以外にオランダの医学を身につけたいと願ひ、シーボルト先生に師事した」

敬作は、杯を傾けた。

「私にとってオランダ語に通じることは、西洋医学を知るための手段であった」

お稲は、敬作の顔に視線を据えた。敬作の顔は醜い部類に入ると言っているが、風格にみちいて重厚な感じがする。自分に向けられる敬作の眼には、医家らしい鋭い光がうかんでいた。

「ところがお稲さんには、オランダ語を習いたいという気持があるだけで、なんのためにという目的がない。いったいどのような知識を得たいと思ってオランダ語を習おうとするのか？」

敬作の声は、大きかった。

お稲は、身をすくめた。敬作の眼には苛立った光がやどっている。酔いに顔を染めた敬作が、腹を立てているようにも思えた。

「どうなのだ、なんのためにオランダ語を習いたいのだ」

敬作の眼が、お稲に据えられた。

お稲は、口をつぐんだ。

敬作は、無言で酒を飲みつづけた。

「お恥しいことですが、私にはわかりませぬ。どうぞお教え下さい」

お稲は、沈黙を破るように言った。

「よろしい。答ははっきりしている。医者として身につけねばならぬ学問だ」

敬作の呂律は、少し乱れていた。

「医学？」

「そうだ。あなたの御尊父は大医家だ。その血をうけついで

いるあなたは、学問をしたいと願っている。その学問とは医学以外にはないではないか」

敬作の顔に、やわらいだ表情がもどった。

「医学を学んでどうするのでしょうか？」

お稲は、いぶかしそうに頭をかしげた。

「当然、医者になるのだ」

敬作の口もとが、ゆるんだ。

お稲は、意外な言葉に呆れた。

医家は男にかぎられ、女医者がいるなどとはきいたこともない。事実、過去をさかのぼっても、日本で女の医家というものは存在したことがなかった。

千百年以上も前の奈良朝の養老六年（七二二）十一月に、女医博士という女の医官が置かれたことがある。官吏の家に雇われている聡明で性格の良い少女をえらんで医官とし、それらの少女に助産術、指圧、鍼灸の方法を教えたのである。しかし、彼女たちは治療に従事することのない助産婦であり、医家ではなかった。その職官も室町時代には廃され、民間の助産婦が子の出産に立ち会うだけになっていた。

「私に、医者になれと言われるのですか？」

お稲は、呆れたように敬作に問うた。

「そうだ。女医者というものは私もきいたことはないが、女が医者になってはならぬという定めはない。オランダ語を習いたいというお稲さんのような女は、誠に稀有な存在だ。いっせ、思いきって女医者を志したらどうだ」

敬作は、淡々とした口調で言った。

お稲は、敬作の言葉をどのように解してよいか判断がつかなかった。世情にうとい十四歳の彼女にとって、女性と無縁の医者になるなどということは夢物語のように思えた。

「私は、あなたに産科の医者になってももらいたいのだ。あなたもおわかりと思うが、女が子供をうむ時、命にかかわる難産になると産婆の手には負えぬ。結局、私たちのような医者と呼ばれる。しかし、女は陰部を私たち男に見せることを恥じる。そのため、最後まで医者を呼ばず手おくれになって命を失う女が、どれほど多いことか」

敬作は、嘆息するように深い息を吐いた。

お稲は顔を赤らめた。もしも自分がそのような立場に身を置いたら、医者にみせるよりはむしろ死をえらんだ方がましだ、と思った。

「もしも、女の産科医者がいたとしたら……難産で苦しむ女たちも、同性の女医者の療治はこばまぬだろう。どの女も出産時には産婆の世話になることでもわかるように、すすんで女医者を呼ぶだろう。早目に療治をほどこせば、女も命を落さずにすむし、生れてくる子供も助かる。医者というものは人の命を救うものだ。それが天からあたえられた使命でもある。多くの同性の命を救うために、女医者になる気はないか」

敬作の眼は、光っていた。

「この世に生れ、多くの人命を救うことができれば人間とし

てこれ以上の幸せはないではないか。シーボルト先生は、産科にも長じた大医家であられた。御尊父の血をつぐあなたが産科の医者になるのは、自然の理だ」

敬作の言葉は、熱をおびていた。

お稲は、体をかたくして坐っていた。体内の血が、激しく循環しているのが感じられた。生れて初めて厳肅な言葉を耳にしたような強い衝撃をうけていた。

深い沈黙が、部屋の中にひろがった。敬作は杯も置き腕を組んで壁に眼を向け、お稲は膝に視線を落していた。

やがてお稲は、眼をあげた。顔は青白かった。

「私に、そのようなことができませんでしようか」

低い声であった。

「なれるかなれぬか、意志次第。何事も必ずやれると思えばその通りになる。まず、やるというかたい意志をもつことだ」

敬作の語気は、鋭かった。

お稲はしばらく口をつぐんでいたが、手をつくると、

「私は、女医者になります。なりとうございます。多くの妊婦の命を救いとうございます」

と、言った。

敬作は、何度もうなずいた。

かれは、お稲が今後女医者になるまでの苦勞を思った。女の身にはさまざまな制約が課せられている。そうした不利な立場で、男に伍して医学の勉強にはげむことはほとんど不可

能に近い。

女の身でありながら……と、非難され、嫌がらせをされることもあるはずだった。女に学問は不要であり、それを敢えて押し切ろうとするお稲には一般的な意味での女の幸福は望むべくもない。むろん結婚などはできるはずもなく、一生、女としての欲びも知らずにすごすことになる。お稲は類い稀な美しい容姿をしていて、年齢的にも女らしさが初々しく匂い出ている。そのお稲に、男たちの中でもまれながら学問をつづけさせ、医者にさせることは酷な仕打ちであった。

異国人の父をもったお稲の宿命なのだろうか、と、敬作は悲哀に胸をしめつけられながら、手をついているお稲を見つめた。

かれは、一人の女性の生涯をふみにじろうとしている自分を感じていた。

翌日、朝食をすませた二宮敬作は、

「一晩たっても考えは変らぬか」

と、白湯を飲みながらお稲にたずねた。

「変りませぬ。先生のお言葉通りにいたしとうございます」

お稲は、神妙な表情をして答えた。

「そうか。それでは私の部屋に來なさい」

敬作は、立ち上った。

お稲は、食器を勝手元で洗ってから敬作の部屋に行った。

敬作は、書見をしていた。

「それでは、今日から医者への学問を授けることにする。ただ

しオランダ語は教えぬ」

お稲は、敬作の表情をうかがった。横文字に魅力をいにく彼女、敬作の言葉に失望した。

敬作はお稲の表情に気づいたらしく、

「不満に思いかも知れぬが、昨夜も申したように、オランダ語は西洋医学の知識を得るための手段にすぎぬ。たとえオランダ語に通じていて西洋の医書を読むことができたとしても、医学そのものに対する基礎知識をもっていなければ、西洋の医書を読んでも内容を理解することはできぬ。そうであるう？」

と、言った。

お稲は、うなずいた。

「まず医学そのものの知識を身につけることからはじめねばならぬ」

「オランダの医学でございませうね」

お稲は、問うた。

「それは、はるかに先のことだ。まずわが国の医学について学ばねばならぬ。それを十分に身につけて、後にオランダの医学の修得につとめる。おのれを知らずして他を知ることができぬ理だ」

敬作は、淀みない口調で言った。

さらに敬作は、

「私は、蘭方医と言われているが日本の医学を決して軽視などとはしていない。日本の医学は支那から伝来したものを基礎

にしているが、先人がそれを日本独自のものに消化し、発展させ、西洋医学に比肩できるまでにたかめた分野もある」

と言って、産科医である賀川玄悦のことを例にあげた。

玄悦は、元禄十三年（一七〇〇）、彦根藩士三浦長富の庶子として生れたため禄をつぐことができず、七歳で母の実家である賀川家に養われた。両親も死亡したので京都におもむき古鉄、古銅などを扱う小商人になったが生活は貧窮し、鍼灸や按摩で辛うじて生きつづけた。そうした中で産科の術を学び、熱心な研究をつづけ、後に一家を成した。そして、明和五年には阿波侯に招かれ、百石の禄を賜る身になった。

かれは、明和三年、六十七歳で「産論」四巻を著したが、その中で胎児の胎内にある折の姿勢について記述し、世の医家たちを大いに驚かせた。それまで、胎児は胎内で頭を上にした姿勢をとっていると言われていた。そして、生れる前に徐徐に「……身ヲ転ジテ下ル」、つまり頭部を下にした姿勢になって生れると信じられていたのである。これに対して、玄悦は「産論」中で、胎児は妊娠五ヶ月で大きな瓜のようになるが、その時にはすでに頭部を下にした姿勢をとっている、いわゆる倒立の形をとっている。倒立していない胎児は難産だ、と述べていた。

「オランダの解剖書を解体新書という一書に和解した杉田玄白殿は、玄悦の産論を読んだ折に、その胎児倒立説に疑惑をいだいた。が、その後、オランダ通詞榎林氏の所蔵するイギリスの産科書をみたところ、附图に受胎してから臨産までの